

# イタリア成人教育とサルデーニャ・プロジェクト

中 嶋 佐恵子

## はじめに

本稿は、1957年から1962年までヨーロッパ経済協力機構（OECE）によりイタリアのサルデーニャ島でおこなわれた地域開発プロジェクトを対象とし、そのプロジェクトのイタリア成人教育史における位置づけを考察するものである。

1953年にOECE内に設置されたヨーロッパ生産性機関（European Productivity Agency, EPA）<sup>1)</sup>は、地域開発プログラムを数多く手がけ、発展途上国のための技術支援プログラムにとって興味深いモデルを提供したといわれる。<sup>2)</sup>そして、これらのプログラムの最も独創的な要素は、実験地域を創設したことであり、その中で最も成功したのはサルデーニャの実験地域であったという<sup>3)</sup>。このサルデーニャの実験地域でおこなわれたプロジェクトは、通称サルデーニャ・プロジェクト（以下SPと略称）と呼ばれてきた。

サルデーニャは、イタリア半島の南に位置し、シチリアに次いで2番目に大きな島である。この島全体がサルデーニャ自治州となっている。SPの実験地域はこの島の西部にある3つの町を結ぶ三角地帯をなし、41のムーネ（市町村）を含む1,756km<sup>2</sup>にあたる<sup>4)</sup>。1961年、この地域の人口は約10万5千人<sup>5)</sup>、14才以上の非識字率は16.3%、14才以上で小学校卒業資格がない者の比率は30.9%となっている<sup>6)</sup>。主な産業は農業と牧羊である。

ベネデット・メローニは2008年の著作において、SPが再評価されつつあると述べ<sup>7)</sup>、その理由の1つに、SPが地域に根ざした働きかけの特殊なモデルを先取りしたことをあげる<sup>8)</sup>。またベント・ボエルは、SPはその方法が生む成果の豊かさを証明したと述べる。その方法は、共同作業班の活用と成人教育からなり、限定された地域で経済発展のすべての側面に同時に向き合うという包括的アプローチに基づくものであったという。<sup>9)</sup>そしてSPの成人教育活動について、アンナ・アンフォッシは、卓越したモデルを提供していると述べる。<sup>10)</sup>

イタリア成人教育史研究においては、SP当事者であるフィリッポ・マリア・デ・サンクティスがSPを成人教育の視点から総括している。それをもとにSP

の意義をまとめると、1、文化活動の担い手のあり方を浮き彫りにしたこと、2、技術的に訓練された集団を形成したこと、3、共同作業班の活動の重要性を際立たせたこと、4、方法と技術の実験を可能にしたこと、5、成人教育分野の働きかけのプロセスの始まりとなったこと、6、SP終了時の引き継ぎにみられた否定的状況に重要な教訓が得られること、となろう。<sup>11)</sup> さらに佐藤一子は、デ・サンクティスがSPを経てフィレンツェ大学の成人教育講座担当教授に就任したことをあげて、SPの成人教育活動が「イタリア成人教育学の発展をもたらし、大学における成人教育研究に結びついていった」ことを示唆している。<sup>12)</sup>

以上を踏まえ、本稿ではSPの背景にある成人教育関係の団体と人物に光をあてる。そしてSP以前からのイタリア成人教育の流れにSPをおくことにより、イタリア成人教育史におけるSPの意味を確認したい。本稿は、SPの成人教育活動とそれをめぐる成人教育団体の動きに注目し、成人教育の担い手のつながりがいかに育ち、何を生み出したのかという視点から、イタリア成人教育史におけるSPの意義を明らかにすることを目的とする。

## 1. SPの構想

### (1) SPの誕生まで

1954年12月、OEECにおいて、EPAはアメリカから西欧への援助の経路であることをやめ、ヨーロッパ北部の援助をヨーロッパ南部へ向ける経路になることが提案された。その提案はEPAの同意を経て1955年11月、OEECに採用された。EPAではその提案はとくにイタリア代表に支持されたとされる。<sup>13)</sup> こうしてEPAはヨーロッパ内の発展途上地域における地域開発プロジェクトにとりくむこととなった。最も活発にプロジェクトの着想を打ち出したのはイタリアであったという。<sup>14)</sup> そしてイタリア、ギリシャ、トルコ、ユーゴスラビア、スペイン、アイスランドの6カ国がプロジェクトに参加することになる。<sup>15)</sup>

サルデーニャが実験地域に決定されるのは1956年である。同年3月にOEECイタリア代表が、モデル地域をサルデーニャに建設するよう申し出、5月に専門家グループがサルデーニャを訪れ、実験地域としてオリスターノ、ポーザ、マコメールの3つの町を結ぶ三角地帯を推薦した。<sup>16)</sup> それが承認され、1957年、SPは始まった。

## (2) SP の理念と組織

地域開発プロジェクトの目的は、技術的支援の提供とモデル地域の建設とによって経済発展を促進することである。<sup>17)</sup> SP の指導原理は次のように定められる。

- a) 一つの地域の経済発展は、インフラへの投資ばかりに依存するのではなく、同程度にその地域の人々の全体的な教育レベルの向上に依存する。
- b) 一つの地域の経済発展は一つの全体を育てる。したがって発展ためのすべての条件を同時に進歩させることが適切である。
- c) 一つの地域の発展は外部から起こすことはできない。その地域の人々によって求められ、実現されるべきである。<sup>18)</sup>

推進組織として、まず1957年6月に国際委員会が設立された。構成員は、EPA、在ローマ米国大使館、南部開発公庫、サルデーニャ自治州、生産性全国委員会、サルデーニャ州生産性センターとされた。しかし1961年には、OECD、南部閣僚委員会、南部開発公庫、サルデーニャ自治州となる。この国際委員会は実際の活動を SP 統括責任者に委ね、事務局長が統括責任者を補助し、運営と財務を受け持つ。統括責任者の下には農業普及部、農村家計部、手工芸・零細企業部、社会部、成人教育部、視聴覚教材部、渉外部、研究・記録部の各部長がいる。<sup>19)</sup> 成人教育部長はユネスコ成人教育委員会専門官ポール・ラングランであった。

農業普及部、農村家計部、社会部は、共同作業班をつくって活動した。各共同作業班は、平均して農業普及員3人、農村女性教師2人、ソーシャルワーカー2人からなっていた。<sup>20)</sup>

## 2. SP の展開

### (1) SP 成人教育部

まず、成人教育部がおこなった活動の輪郭をたどってみよう。

成人教育部は、プログラムの実際の活動を地元のアニメトーレ（文化活動の組織者）に委ねることにした。具体的にはそこに住む小学校教師と大学生で、主には若い人たちである。したがって成人教育部の仕事の大半は、地元のアニメトーレの養成に向けられた。<sup>21)</sup> そして活動の「枠組みを立ち上げる」ため、成人教育部主催の合宿コースや他団体による合宿コース、その他各種の会合などがおこなわれた。中でも合宿コースはとりわけ重要であったとされる。理由として、短期間に最大限の課題にとりくめることや、生活をともにする中で参

加者相互の信頼関係が構築できることなどの利点があげられている。合宿コースでは、成人教育の原理と方法、表現豊かな朗読、読書カードの活用、図書館の設立、視聴覚教材の利用、環境調査などの内容がとりあげられた。合宿コースを組織した団体には、ウマニタリア協会、市民共同運動（MCC）などがある。<sup>22)</sup>

また成人教育者対象の合宿コースは、成人教育部が、サルデーニャの成人教育にかかわる団体との協力関係をつくる機会となり、これらの団体の代表者に、SP主催の現地教育への参加を促す機会ともなったという。SPの現地教育に参加した団体には、全国識字連合（UNLA）、サルデーニャ土地所有・農業変革団体（ETFAS）、イタリア労働者キリスト教協会（ACLI）、イタリア女性センター（CIF）、ONARMO、家族移民全国協会（ANFE）、イタリア・カトリック教師協会（AIMC）、フルメンドーザ自主団体などがある。<sup>23)</sup>

成人教育部の活動の開始は1958年夏から秋頃と推定される。<sup>24)</sup> この頃から1年ほどの間に開かれたコースは「世界に挑む人間」を中心テーマにして展開した。2年目（1959年秋から）に入り、活動の大部分はアニメトローレに委ねられた。3年目の初め（1960年秋）、視聴覚教材部の移動撮影用自動車を使った実験が貴重な手がかりをもたらした。その実験は、若者たちの集団を、初めて舞台の前方へ押し出し、教師たちのもとへ連れて行き、「何かをする」ことへつないだ、という。<sup>25)</sup>

こうして、町村立文化センターが設立されるに至った。コムーネが場所を確保し、サルデーニャ図書局が図書を貸与する場所をつくり、地元の若いアニメトローレが成人教育部の支援を受け、ボランティアで運営したという。<sup>26)</sup>

次に、以上の成人教育部の活動に協力した成人教育団体とSPとのかかわりを見よう。

1年目のアニメトローレ養成コースについて、SPの統括責任者であるギラルデットは、一番初めに開かれ、最も重要であったのはウマニタリア協会の合宿コースであるとしている。<sup>27)</sup> その合宿コースは、1958年11月23日-12月7日、ウマニタリア協会がピエモンテ州メイナに所有するアウグスト・オージモ合宿センターで開かれた。<sup>28)</sup>

ウマニタリア協会がSPにかかわったのは、遅くとも1958年4月である。<sup>29)</sup> ウマニタリア協会会長リッカルド・パウエルは、これより数年前からユネスコ成人教育専門家委員会の委員として、ラングランとともに仕事をしてきた。またラングランは、パウエルが会長をつとめるイタリア民衆文化連合（UICP）の大会にユネスコ代表として出席し<sup>30)</sup>、かねてよりUICPと交流があった。

ウマニタリア協会は、最初の合宿コース以外にも SP へ様々な協力をおこなった。たとえば、1959年9月21-27日、オリスターノで開かれた成人教育研究セミナーの開催に協力し、そのセミナーにおいてウマニタリア協会事務局長マリオ・メリーノが民衆教育についての講座と、グループワークについての講座をもっている。また1960年10月9-17日、図書の貸し出し担当責任者のためのコースをウマニタリア協会において開催し、メリーノがサルデーニャ図書館の担当者とともに運営にあたった。<sup>31)</sup>

そして SP に協力する成人教育団体の様子は、SP が1959年7月15日にキャリアの SP 事務所で開いた第1回サルデーニャ成人教育活動団体経験交流会議の報告書<sup>32)</sup> でうかがえる。この会議は、SP の成人教育活動1年目を終えるにあたり、サルデーニャの成人教育に携わる団体と成人教育の経験や考えを交流する目的で開かれた。(報告書 p.1)

招集されたのは、1958年から1959年前半までにサルデーニャで成人対象のコースを開いた10団体で、このうち ETFAS、フルメンドーザ自主団体、全国青年事務局、ONARMO、UNLA、CIF、ANFE、ACLI の8団体が参加した。参加者は、この8団体から10人、SP から8人(成人教育部長ラングラン、社会部長、視聴覚教材部長デ・サンクティス、手工芸部長など)、サルデーニャ州行政関係者、学校教育行政関係者、その他に招待された者をあわせた13人の計31人であった。議長はパウエルがつとめた。(pp.1-3)

各団体の発言から、活動内容には、合宿コース(p.16)、テレビや映画の鑑賞会(p.16)、種々多様な学習コースがみられる。悩みとして、講師を見つけることの困難さ(p.5)、場所の確保(p.6)、電気の不足により視聴覚機器が使えないこと(p.6)、設備の不足(p.11)、ボランティアにたよっていること(p.14)、などが出され、同じ領域で活動する団体間の調整の必要性(p.7)が指摘された。

今後の課題として、ラングランは、密度の高い活動組織を構築するため、実験地域のほとんどすべてのセンターでコースを開くこと(p.23)、成人教育のアニメトーレのコースをさらに開くこと(p.48)、同じ地域で活動を継続、反復し、その先に UNLA の民衆文化センターのようなものをめざすこと(p.25)、SP の成人教育活動は、(経済的な利害からではなく)文化的な関心から直接出発すること(p.28)を示した。また、パウエルは、成人教育者の数を増やす必要があることを確認し(p.46)、活動の継続性は個々の団体の善意に委ねるのではなく、コムーネなどに引き継がせることが不可欠であること(p.25)、州の援助も得て、設備を増やすために公教育省に影響を及ぼす必要があること

(p.46)、を指摘した。

ラングランがモデルとしてあげている民衆文化センターを運営する UNLA は、イタリア南部を中心に識字教育を展開している団体である。UICP 加盟団体であり、会長アンナ・ロレンツェットは1958年から UICP の運営委員・全国評議員を<sup>33)</sup>、1960年から全国評議員をつとめている<sup>34)</sup>。UNLA の民衆文化センターは、1961年夏頃には国内に74あり<sup>35)</sup>、サルデーニャには、1962年6月で15ある。このうち5つが SP 実験地域にあり、さらにその1つは SP において設立されている。マンチェスター大学構外教育部教授ロス・D・ウォーラーは、SP よりずっと古くからあるサントウルスルジュにあるセンターは、自らの役割として開発の活動を展開しており、開発プロジェクトと地元で生まれ育った組織との間に構築しうる関係の、興味深い例を提供していると指摘する。このセンターの受講生が、SP 手工芸・零細企業部の働きかけによって生まれた織物女工協同組合の担い手であるという。<sup>36)</sup> このサントウルスルジュのセンターの活動は、1960年度には、自主的な研究グループ部、文化部、音楽・合唱コース、夜間中学校コース、外国語コース、簿記・協同組合運動コース、無線通信工学の初歩のコース、職業コース、識字コース、労働者コースなど多岐にわたっている。<sup>37)</sup>

## (2) SP 視聴覚教材部

先にみたように、成人教育部の活動において視聴覚教材部の活動は少なからぬ影響を与えた。その活動の様子と背景にある成人教育団体の動きをみよう。

視聴覚教材部の移動班は、映写機、映画フィルム、民謡を収拾し再生するための拡声器付き録音・再生機、無償で貸与する本を備えた小さな書架、広場に掲示するためのポスターを携行して活動した。デ・サンクティスは、村の若者8人が3日で公立図書館を設立した例をあげ、移動班が入ったすべての村で程度の差はあれ結果を出せたと述べる。そして移動班のような効果的な一撃によってのみ、満足できる結果をごく短期間で得ることが可能であると分析し、映画という手段の役割を確認している。<sup>38)</sup>

この活動は、村の人々だけではなく、活動に参加したカリアリ大学映画センターの学生たちにも変化をもたらした。彼らは、農家、農業や牧羊の協同組合、社会センター、図書館、村の広場を、移動撮影用自動車で訪ね、そこで映画を映写し、村の人々と議論する、という経験を通して意識を変えていったという。<sup>39)</sup>

視聴覚教材部の活動は、ソーシャルワーカーの活動と連携することもあった。

また、成人教育部、農業普及部、農村家計部の活動にも短編映画が役立ったという。たとえば、灌漑のための運河を造るのに農民の協力を得ようと、農民に土壌について学ぶ意味を説明する時、また卸売りで飼料を有利に購入するために共同するよう村の女性に促す時、短編映画は教育プロセスを促進した。<sup>40)</sup>

先にあげたキャリアリ大学映画センターは、1953年に創立され、検閲に対する抵抗運動の経験を経て、イタリア映画サークル連盟 (FICC) に加盟した。SP 当時のセンター会員数は800人であったという。<sup>41)</sup> そして FICC の事務局長をつとめていたのは、デ・サンクティスであった。

FICC は、1958年、UICP に加盟した。<sup>42)</sup> これより前に、1955年から1957年の間にイタリア映画サークル連合 (UICC) が UICP に加盟している。<sup>43)</sup> FICC と UICC の二つの代表的な映画サークル組織が UICP に加盟したことは、民衆文化団体に映画への、そして映画サークルには民衆文化の問題へのより強い関心を引き起こしたという。<sup>44)</sup>

そして1960年の UICP 第5回大会では、4つの分科会のうち2つが映画サークルに関するものとなっており<sup>45)</sup>、大会で打ち出された今後2年間の「民衆文化」の編集方針は、特集号にあてる3つの号のうち2つを映画に関するものとしている<sup>46)</sup>。UICP が映画活動を重視していることがわかる。

次に、UICP の映画にかかわる動向が SP 成人教育部へと合流する流れをみよう。

1958年6月6～7日、UICC は、映画文化普及の展望を議論するための研究会を開催した。UICP からはメリーノが参加し、「イタリアにおける民衆文化の展望と方法」と題する報告をした。この会議の最後に、続いて全国会議を開催することが提案された。<sup>47)</sup>

これを受けて、1959年4月18-19日にローマで「民衆文化の手段としての映画」についての全国会議が開催された。この会議は、映画による民衆教育の方法を明らかにすることを目的とし、映画実験センター、UICP、映画サークル全国団体連絡委員会が主催する。出席者には、公教育省民衆教育中央部、公教育省視聴覚教材全国センター、FICC、UICC、UNLA、ウマニタリア協会、イタリア文化レクリエーション協会 (ARCI)、ユネスコ、ユネスコ国内委員会その他様々な団体からの代表者があった。ユネスコからはラングランが出席していた。議長2人のうち1人はパウエルであった。<sup>48)</sup>

最初にメリーノが「イタリアの歴史的状況と近代教育学、における成人教育と映画サークル」と題する報告をした。<sup>49)</sup> 次にデ・サンクティスが「民衆文化を目的とした映画活動の組織化」と題する報告をし、映画活動の具体的な手法

について述べた。<sup>50)</sup> 討論においてラングランは、映画を活用した民衆教育の経験が不足しているので、さらに注目し、研究していくことが求められるという趣旨の発言をしている。<sup>51)</sup> 会議の最後には、成人教育を目的とした映画の活用方法についての実地教育を早急に案内し、アニメトーレ養成のための実地教育を増強することを含む動議を採択した。<sup>52)</sup> この会議の時期は、SP 成人教育部の活動1年目にあたる。これを経て視聴覚教材部の活動は、成人教育部に影響を与え、成人教育活動を促進することになった。

### 3. UICP 第6回大会

1962年6月1～3日、オリスターノでUICP第6回大会が開かれた。この大会は大きく2つの部分からなり、1つはUICPとイタリア民衆図書館連盟(FIBP)の総会、もう1つはSPと、ユネスコによりイタリア中部アブルツォ州でおこなわれた実験プロジェクトの3年間の成果を検証する研究集会となっている。<sup>53)</sup> 参加者は、UICP加盟団体54のうち43団体からの代表、FIBP加盟団体のうち90団体からの代表、その他131人であった。その他の人々のうち60人以上はサルデーニャからの参加者であった。またラングランは欠席であった。<sup>54)</sup>

以下、この大会におけるSPの総括のポイントを洗い出してみよう。SP統括責任者ギラルデットは、農業部のどの活動においても常に教育の概念に行きあたったこと、活動が教育的特徴を帯びていることは、農村家計部の活動においてより明白であること、社会部については、本来の技術支援より教育活動に重点がおかれたこと、ソーシャルワーカーが農業、手工芸などの分野で技術支援を支えたこと、ソーシャルワーカーの心理学的準備なしには技術支援ができないことが少なくなかったこと、などをあげ、SPは経済的・技術的介入を実現するために不可欠な基礎として教育活動を余儀なく迫られたと述べる。成人教育部については、他の機関との協力が絶えず緊密であったこと、とくにUNLAの民衆文化センターを存分に活用できたこと、小学校教師が成人向けの教授技術を学ぶための実践をしたこと、視聴覚教材が常に活用されたこと、などをあげている。<sup>55)</sup>

パウエルは、達成すべきところには遠いとしても、方法についてはみるべきものがあると述べる。SPの実験の価値は共同作業班の協調的な組織化にあり、文化活動はおかれた環境の中で他の分野の活動と統合されるべきものである。この点でSPの経験は貴重であり模範的であるという。<sup>56)</sup>

この2人の報告から、どの分野においても教育活動が基礎として重要で不可欠である一方、それゆえに教育活動は他の分野の活動と結びつき、統合されるべきものであること、成人教育活動は既存の成人教育団体の力を得てすすめられたこと、視聴覚教材が役割を果たしていたこと、を成果の要点としてとりだすことができよう。

ところで、この研究集会には、SP終了後いかにして活動を継続するかを導きだすことが求められていた。ギラルデットが述べるように、SPがめざすのはSP終了後に教育分野において自律的に機能し続ける組織体を残すことである。<sup>57)</sup> パウエルが議長をつとめた第3分科会は、プロジェクトから通常の活動へ移行するための普遍化が課題とされていた。<sup>58)</sup> そのまとめの報告では「技術的-教育的に統合された支援の核」を形成することと、地域の意見を聴く委員会の設置が提案されている。そして活動継続の可能性は、世論をつくり地方行政に影響を与えることにかかっており、それゆえ成人教育は社会発展のすべての活動の鍵であるという。さらに、技術的経済的領域における社会事業では教育者の態度が必要であると同時に、教育に特化された領域での社会事業では経済・社会問題にたいして開かれた態度が必要であること、異なる領域の活動の間で絶えざる協力が必要であること、成人教育の拡大には十分な効果を持つ義務教育学校が不可欠であること、などが示された。<sup>59)</sup>

またウォーラーは、UNLAの民衆文化センターのようなものを州レベルで設置することや、行政官とすべての事業者の養成・研修などを提案している。<sup>60)</sup>

#### 4. SPの終了とその後

1962年12月、SPは終了した。同じ時期、オリストアーノにサルデーニャ文化センター自主連盟(FACCS)が設立され、FACCSはSP成人教育部の図書館や、OEECが残した家具などを引き継いだ。この構成団体である6つの文化センターは、1961年2月から1962年11月までに設立されており、うち5つは、OEECによって設立されたか、SPを経験して設立された。<sup>61)</sup>

このようにSPの経験を引き継ぐための動きはあった。しかしSP終了後、行政機関は全体的なコーディネートを引き受けることはなく、それ以外の地元の団体にも引き受けるものはなかった。<sup>62)</sup>

こうした中、1963年、ウマニタリア協会は、南部開発公庫からの寄付を得て、第2次大戦後初めての地方事務所をサルデーニャに開いた。<sup>63)</sup> 事務所の目的は、

サルデーニャ成人教育の担い手が生まれ育つのを、技術的-教育的な協力により、助けることである。助言とアニメトレ養成を重視し、既存の団体にとって代わるのではなく、それを支えることを旨とする。<sup>64)</sup> この事務所の専任職員として、SP 当時、カリアリ大学の学生で、カリアリ大学映画センターに所属し、SP 視聴覚教材部の活動をしていたファビオ・マーサラが採用される。<sup>65)</sup>

1965年、ウマニタリア協会の方針に、サルデーニャにフィルム・ライブラリーをつくることが掲げられ、1966年に実現した。<sup>66)</sup> フィルム・ライブラリーは映画フィルムの貸し出しなどにより、映画を活用した学習活動の支援を始めている。

こうして SP により生まれた町村立文化センターの他に、ウマニタリア協会、UNLA などの民間団体の活動が継続し、FICC については1965年にサルデーニャの加盟サークルが1つだったのが、1968年には45となり、全国157サークルにおける3割近くを占めるまでに発展した。<sup>67)</sup>

## おわりに

SP には、これまでみたように、多くの点で成果がみられた。実は、イタリア側が実験地域からの同意を得るためのステップを踏んでいなかったこと<sup>68)</sup>、州当局が消極的であったこと<sup>69)</sup>、州レベルの開発計画がなかったこと<sup>70)</sup>、など政治的な問題が活動の妨げとなっていた。その中で、以前から行政の不十分さを引き受けて活動してきたウマニタリア協会や UNLA などが、経験の蓄積を生かし、またそれら相互のつながりやユネスコとの関係を生かして SP に貢献した。SP は EPA という国際組織のものであったが、内実をつくったのはこれらのイタリアの民間団体によるところが大きいといえる。

SP とそれ以後の状況により、これら全国的民間団体の役割とそれら相互の結びつきのもつ可能性が浮き彫りになったといえるのではないか。さらに SP により示されたのは、異なる分野の担い手のつながりが重要であるということである。マーサラが、SP のいくつかの分野の活動が「一定数の知識人やサルデーニャの団体を成人教育の方へ向けることにおいて決定的な影響力を持った」<sup>71)</sup> と述べるように、SP は成人教育と他分野における担い手のつながりが生まれる契機をつくったという点でも意義があるといえよう。

## 注

1) EPA は1961年、OEEC が OECD に転換すると同時に解消した。Bent Boel,

- “The European Productivity Agency, 1953-1961”, in Richard T. Griffiths (ed.), *Explorations in OEEC History*, OECD, 1997, p.113.
- 2) Daniel Barbezat, “The Marshall Plan and the Origin of the OEEC”, in Richard T. Griffiths (ed.), *Explorations*, p.39.
  - 3) Boel, *The European Productivity Agency and Transatlantic Relations 1953-1961*, Museum Tusulanum Press-University of Copenhagen, 2003, pp.204-206.
  - 4) Anna Anfossi, *Socialità e organizzazione in Sardegna. Studio sulla zona di Oristano-Bosa-Macomer*, Cooperativa Universitaria Editrice Cagliari, 2008, p.97.
  - 5) *ivi*, p.98.
  - 6) *ivi*, p.181.
  - 7) Benedetto Meloni, *La costruzione sociale dello sviluppo territoriale. Dal Progetto Sardegna dell'Oeece alla Progettazione Integrata*, Anfossi, *op. cit.*, p.9.
  - 8) *ivi*, p.10.
  - 9) Boel, *The European Productivity Agency*, 2003, p.219.
  - 10) Anfossi, *op. cit.*, p.187.
  - 11) Filippo Maria De Sanctis, *Educazione degli adulti in Italia 1848-1987. Dal “diritto di adunarsi” alle “150 ore”*, Editori Riuniti, 1987, pp.298-299.
  - 12) 佐藤一子『イタリア学習社会の歴史像－社会連帯にねざす生涯学習の協働』東京大学出版会、2010年、p.138。
  - 13) Boel, *The European Productivity Agency*, 2003, p.201.
  - 14) *ibid.*, p.207. Paolo Terni, *Elementi per una storia generale del “Progetto Sardegna” (1957-1962)*, 1962, p.3. による。この内容は Caracciolo di Forino へのインタビューによる。
  - 15) *ibid.*, p.202.
  - 16) *ibid.*, pp.207-208. Terni, *Elementi*, p.10 e pp.13-17. による。
  - 17) *ibid.*, p.203.
  - 18) Terni, *Definizione, cenni storici e strutture organizzative del Progetto*, in “Ichnusa”, n.43, 1961-IX-4, pp.13-14. 目次には *Storia e struttura del “Progetto”* とある。
  - 19) *ivi*, pp.14-15.
  - 20) *ivi*, p.15.

- 21) Elena Borghese, Antonio Cortese, Jacques Mawas, *L'educazione degli adulti*, in "Ichnusa", n.43, 1961-IX-4, p.64.
- 22) *ivi*, pp.67-68.
- 23) *ivi*, p.68.
- 24) SP が1959年7月15日にキャリアの SP 事務所で開いた第1回サルデーニャ成人教育活動団体経験交流会議の報告書に、「活動1年目の終わりにあたり」とあることによる。OECE-AEP Progetto Sardegna. Servizio Educazione degli Adulti, *Atti della prima riunione di scambio di esperienze tra enti operanti nel campo dell'educazione degli adulti in Sardegna* (Cagliari, 15 luglio 1959), 1959. p.1.
- 25) Borghese ed altri, *op. cit.*, pp.69-70 e p.72.
- 26) *ivi*, p.72.
- 27) *Il progetto Sardegna O.E.C.E.-Sardegna*. (Relazione del J. Girardet), in "Cultura Popolare", 1962, n.4, p.183.
- 28) Società Umanitaria, *Relazione sull'attività sociale dal 1956 al 1960*, 1961, p.81.
- 29) バウエルからラングランへの1958年4月26日付の手紙。ウマニタリア協会の1958年189号書類の登録番号 2440。
- 30) 1955年の第3回大会、1957年の第4回大会にユネスコ代表として出席している。"Cultura Popolare", 1955, n.3, p.133. "Cultura Popolare", 1967, n.6, p.232.
- 31) Società Umanitaria, *Relazione dal 1956 al 1960*, pp.135-136.
- 32) OECE-AEP Progetto Sardegna. Servizio Educazione degli Adulti, *Atti della prima riunione*, 1959.
- 33) *Relazione morale e finanziaria dell'Unione Italiana della Cultura Popolare per il biennio 1958-1959*, in "Cultura Popolare", 1960, n.2, p.98.
- 34) *Relazione morale e finanziaria dell'Unione Italiana della Culture Popolare per il biennio 1960-1961*, in "Cultura Popolare", 1962, n.4, p.207.
- 35) Anna Lorenzetto, *Alfabeto e analfabetismo*, Armando Armando Editore, 1962, p.125.
- 36) *L'educazione degli adulti nei progetti pilota. Generalizzazioni delle esperienze in essi compiute*. (Relazione del Ross D. Waller), in "Cultura Popolare", 1962, n.4, p.172.
- 37) Lorenzetto, *op. cit.*, p.85.

- 38) De sanctis, *Uno sguardo generale all'uso dei sussidi audio-visivi nel "Progetto Sardegna OECE-AEP"*, in "Cultura Popolare", 1961. n.3, pp.111-112.
- 39) De Sanctis, Fabio Masala, *Pubblico e cineteche. Nuove frontiere del lavoro educativo all'uso del cinema*, Bulzoni Editore, 1983, p.116.
- 40) De sanctis, *Uno sguardo generale*, pp.113-114.
- 41) De Sanctis, Masala, *op. cit.*, pp.115-116.
- 42) *Attività e orientamenti dell'Unione Italiana della Cultura Nazionale Popolare. Relazione annuale del Comitato Direttivo al Convegno Nazionale*, in "Cultura Popolare", 1959. n.1, p.15.
- 43) *Relazione morale e finanziaria*, in "Cultura Popolare", 1957, n.6, p.321.
- 44) *Relazione morale 1958-59*, p.103.
- 45) 4つの分科会は、1、民衆図書館、2、民衆文化サークルと企業文化サークル、3、映画サークルと文化団体の映画部門、4、民衆大学と類似機関、となっている。V Congresso Nazionale della Cultura Popolare e della Federazione Italiana delle Biblioteche Popolari. *Cronaca dei lavori*, in "Cultura Popolare", 1960, n.2, p.54.
- 46) 3つの号に予定されている特集は、1、前回大会の報告集 2、映画サークル 3、「映画と民衆教育」についての全国会議、となっている。*Relazione morale 1958-59*, in "Cultura Popolare", 1960, n.2, p.100.
- 47) *Relazione morale 1958-59*, p.103.
- 48) Mario Melino, *Educazione degli adulti e circoli del cinema nella situazione storica italiana e nella pedagogia moderna*, in "Cultura Popolare", 1959, n.3, p.83.
- 49) *ibidem*.
- 50) De Sanctis, *Organizzazione di attività cinematografiche a scopi di cultura popolare*, in "Cultura Popolare", 1959, n.3, pp.94-99.
- 51) *La discussione. Problemi e proposte*, in "Cultura Popolare", 1959, n.3, p.105.
- 52) *ivi*, p.110.
- 53) VI Congresso Nazionale della Unione Italiana della Cultura Popolare e della Federazione Italiana delle Biblioteche Popolari. *Cronaca dei lavori*, in "Cultura Popolare", 1962, n.4, p.162.
- 54) VI Congresso Nazionale, in "Cultura Popolare", 1962, n.4, pp.240-244.
- 55) *Il progetto O.E.C.E.-Sardegna*. (Relazione del Girardet), pp.178-184.

- 56) Riccardo Bauer, *Attività sociale ed esperienze pilota*, in “Cultura Popolare”, 1962, n.4, pp.155-156.
- 57) *Il progetto O.E.C.E-Sardegna*, pp.179-180.
- 58) *Cronaca dei lavori*, in “Cultura Popolare”, 1962, n.4, p.162.
- 59) *Come passare da una fase di esperimento, dato da un progetto pilota, a un lavoro normale e generalizzato*, in “Cultura Popolare”, 1962, n.4, p.205.
- 60) *L'educazione degli adulti nei progetti pilota*. (Relazione del Waller), pp.173-174.
- 61) Bauer, *Struttura e funzioni dei circoli culturali popolari*, in “Cultura Popolare”, 1965, n.3, pp.211-215.
- 62) De Sanctis, Masala, *op. cit.*, p.117.
- 63) Masala, *I circoli del cinema d'associazionismo popolare: L'esperienza della cineteca sarda*, in “Cultura Popolare”, 1970, p.249.
- 64) De Sanctis, Masala, *op. cit.*, p.117.
- 65) 佐藤一子『イタリア文化運動通信』合同出版、1984、p.84。
- 66) De Sanctis, Masala, *op. cit.*, pp.124-126.
- 67) *ivi*, pp.138-139.
- 68) Boel, *The European Productivity Agency*, 2003, p.209.
- 69) *ibid.*, p.217.
- 70) *ibid.*, p.208.
- 71) Masala, *L'Umanitaria in Sardegna per l'educazione degli adulti*, in “Cultura Popolare”, 1965, n.5, p.341.

## Adult education in Italy and the Sardinian Project

Saeko NAKAJIMA

The purpose of this paper is to clarify the place of the Sardinian Project in the history of adult education in Italy, focusing on the organizations and key persons related to adult education activities in Italy.

The Sardinian Project was planned for territorial development by the Organization for European Economy Co-operation (OECE) and was put into practice from 1957 to 1962 in the triangle territory on the Island of Sardinia in Italy.

The project was comprised of 8 sections which included the adult education section, the audiovisual aids section, the social service section, and the rural domestic economy section. This paper especially deals with the adult education section, the audiovisual section and national associations which took part in the project.

The national associations which had evolved adult education activities like the Humanitarian Society (Società Umanitaria) and the National Union for the Struggle against Illiteracy (Unione Nazionale per la Lotta contro Analfabetismo) contributed to the project based on their experiences and through their mutual relationship. The project reinforced their roles and the possibility of their forming bonds with each other. Further more the project created an opportunity to tie the pillars of adult education with those of different fields.